

Ⅲ. 育成期の飼養管理

1. 4～10ヵ月齢における腹づくり.....

☆ポイント☆

腹づくりにおけるポイント

- ルーメンの容積、胃壁の厚さ、緻密で健康な絨毛の発育
- 腹づくりは生後4～10ヵ月齢、特に生後8ヵ月齢を中心に行う
- 通算DGが1.2kgに満たなければ腹づくりの失敗が考えられる

4～6ヵ月齢

- 牛がやせるような粗飼料多給は腹づくりの失敗
- 配合飼料給与量は月齢を目安とするが、数値の一人歩きに注意
- 配合飼料の漸増は500g単位で行う
- この月齢の期間、DGは1.2kgを目安とする

7～10ヵ月齢

- 粗飼料2kg以上を8～9ヵ月齢に食べさせる。配合飼料は定量給与
- ある程度硬めの粗飼料を栄養価とともに意識して給与
- やせすぎず、太りすぎずの体型。粗飼料給与量が一人歩きしないこと
- 急激な配合飼料の増量は絶対にしないこと、今までの腹づくりが無駄になる
- 10ヵ月齢では配合飼料型へのルーメンの馴致

1) 腹づくりにおけるポイント

牛の腹づくりの重要性については、誰もがその必要性を唱える。しかし現実には肥育成績を見ると、例えば乳用種去勢牛の通算DGが1.2kgに満たないような場合、もう一度腹づくりが出来ているかどうか考えてみる必要がある。

例えば腹づくりを判断する一つの目安として、食い込みの一番あがる月齢と配合飼料の摂取量（現実には給与量）がある。生後14ヵ月齢前後で12～13kgの配合飼料を食い込んでいるだろうか。たとえ最高の配合飼料であっても食い込みのピークで12～13kg食い込めないようでは、おそらく腹づくりができていない（腹づくりをしたつもり⇒腹づくりの失敗）可能性がある。配合飼料の品質向上はもちろん大切であるが、車に例えるならば、ハイオクガソリンを入れても対応できるエンジンでなければ、それなりの馬力はないものである。

腹づくりがうまくいくと、今までと同じ配合飼料であっても肥育成績が向上する。もちろんルーメンアシドーシスや尿結石等の事故も減少する。いくつかの農場間で同じ配合飼料、粗飼料を給与していても、肥育成績に差がつくのは腹づくりの違いによることが多い。

肥育専業の場合、一般的には6～7ヵ月齢の肥育もと牛を導入し馴致以後そのまま肥育することが多いが、せめて10ヵ月齢までは腹づくりが必要な月齢であると考えたいものである。肋張りのある腹づくりのできた肥育もと牛を導入することはもちろん大切なことであるが、もと牛導入後さらに3～4ヵ月間は粗飼料重視、特に生後8～9ヵ月齢を中心とした腹づくりの飼養管理がその後の肥育成績を左右するといってもよい。つまり一貫肥育でも、肥育もと牛導入でも、考え方は同じで、この月齢で「もう一度腹づくり（ミノづくり）」をすることが大きなポイントになる。なお、この月齢を逃すと腹づくりはうまくいかないものである。

2) 4～6ヵ月齢

良質乾草給与が基本の月齢であるが牛がやせるような粗飼料多給は問題がある（「腹づくりにおける勘違い、間違い」の項を参照）。配合飼料は給与量を正しく量り給与する。

そして何よりも大切なことは規則正しい給与時間である。飼料の給与時間が不規則だと、おなかが空き過ぎて、急激に食べ、せっかくの腹づくりがうまくいかないものである。定時による規則正しい給与管理が大切である。

飼料給与は全頭が並べる飼槽幅を確保する。良質乾草は配合飼料給与の1時間前に給与し、その後に配合飼料を給与する。さらに、良質乾草は不足しないように1日数回給与する。定量給与の月齢にもよるが、配合飼料はおおよそ3～6時間程度でなくなり、後は良質乾草を食べることになる。1日1回の配合飼料・定量給与も群飼の場合には有効な腹づくりの飼養管理方法である。

4～6ヵ月齢の配合飼料給与量は、ほぼ月齢見合いが目安となる。例えば5ヵ月齢＝5kg、5.5ヵ月齢＝5.5kg、6ヵ月齢＝6kg。なぜ5.5ヵ月が必要かという点、5kgから6kgでは、1kgの差があり、5kgのままでは5.5ヵ月齢では栄養が不足することになるからである。



写真61 6ヵ月齢前後の体型